

## 小学生の援助要請行動を阻害する要因の探索と その測定尺度作成の試み

○菊地重矢子 (岩手大学大学院)

山本 奨 (岩手大学)

キーワード：小学生，援助要請行動

### 問題と目的

文部科学省・厚生労働省 (2018) は、自殺対策基本法を基に「各教科等の授業等の一環として、SOS の出し方に関する教育を少なくとも年一回は実施する」よう各校に通知している。これにより教師は援助要請の方法を児童生徒に指導することとなったが、何を指導すれば児童生徒がこれを身に付けられるのかは、未整理の状況にある。そもそも児童生徒はなぜ援助要請行動を躊躇うのであろうか。この問題についてはこれまで経験や質的研究を基に論じられることが多かったが、量的に実証されることは少なかった。そこで、本研究では、小学生の援助要請行動を阻害する要因の構造を明らかにすると共に、各個人の阻害の様子を測定する尺度を作成することを目的とする。

### 方 法

**調査対象者** 公立小学校の 4-6 年生の児童 212 名 (男子 107 名，女子 105 名)

**実施時期** 2020 年 11 月

**調査手続き** 学校長に調査依頼を行い、各学級担任に主旨と方法及び児童の安全に係る配慮事項を説明した。調査対象となる児童に対しては各学級担任が質問紙を配付し、説明を行い、その場で回答を求め回収した。

**調査材料** 以下の手続きによって作成された暫定尺度を用いた。

まず、山本 (2019) を参考に項目を作成し、次に、公立小学校 5 年生 35 名に「学校で困ったことがあったとき、誰かに相談しようと思っても、なかなか相談できないと思うこともあります。あなたなら、先生や友達にどんなことをしてもらったら相談しやすいか、思いつくことを書いて下さい。」と問い、自由記述で回答を求め、結果を整理した。両者は概ね一致するものであったが、前者にはなく後者から得られた「忙しそうで相談する時間がなさそうだから」と「自分に『何か困っていることある?』と声をかけてくれないから」を追加することとした。

ここで得られた 17 項目からなる暫定尺度に関し、教師と友達をそれぞれ対象とする合計 34 項目について、「かなりそう思う」から「全くそう思わない」までの 5 件法で回答を求めた。

### 結果と考察

回答が得られなかった者と、無回答項目があつ

た者を削除した後の構成は、4 年生 63 名 (男子 33 名，女子 30 名)，5 年生 58 名 (男子 30 名，女子 28 名)，6 年生 74 名 (男子 36 名，女子 38 名)，計 195 名であり、回答率は 91.98%であった。ここでは、教師に対する回答と、友達に対する回答を併せて因子分析することとしたため、分析に用いられたデータは全部で 390 件であった。

児童の援助要請行動を阻害する要因を探索するために因子分析 (最尤法) を行ったところ、固有値が 1 以上となる 3 因子が見出された。第 3 因子までの累積寄与率は 56.661%であった。

第 1 因子では、「相談することで、迷惑をかけたくないから」「相談しなかったことを、責められそうだから」「相談したら、弱い人間だと思われそうだから」などの 8 項目に高い負荷量が見られた。これらは、相談することで教師や友達から自分がかかっているかという、相手からの評価が気にかかって不安になることに関するものであると考えられた。そこで、『評価への懸念』と命名した。

第 2 因子では、「相談しても、役に立つ返事がもらえないと思うから」「話しても、どうせ変わらないと思うから」「相談しても、余計にこじれそうだから」などの 6 項目で高い負荷量が見られた。これらは、相談相手を信じられない、信じていても裏切られるかもしれないことへの不安に関するものであると考えられた。そこで、『対象への不信』と命名した。

第 3 因子では、「相談せずに、自分で解決すべきだと思うから」「相談して、相談事を解決したいと思わないから」「相談すべきことか分からないから」の 3 項目で高い負荷量が見られた。これらは、他人に頼ることなく自分で解決すべきだという考えに強いこだわりがあると考えられた。そこで、『自立への固執』と命名した。

次に、これらの因子に高い負荷量を示した項目を用いて、足し上げ点による下位尺度を構成することを試みたところ、Cronbach の  $\alpha$  係数は、順に .838, .849, .713 であり内的一貫性が確認された。

援助要請行動に関する指導を行うに際しては、スキルなど方法に加えて、阻害要因である『評価への懸念』、『対象への不信』、『自立への固執』に焦点を当てた指導プログラムを作成する必要があると考えられた。併せて、その効果に関し測定尺度を用いて検証する必要があると考えられた。